

〈学術研究集会傍聴記〉

日本野外教育学会 第21回大会 傍聴記

江川 潤*

Jun EGAWA*

2018年6月22日から24日まで、信州大学教育学部で開催された日本野外教育学会 第21回大会に参加した。野外教育学会は、野外教育を学際領域として位置づけ「自然・人・体験」の3つのキーワードを柱とし、野外活動、自然体験、冒険教育、環境教育等に携わる実践者・研究者で構成され、昨年に20回記念大会を迎えた比較的若い学会である。そこで第21回大会で小生が参加した各セッションを抜粋しここに報告をしていく。

基調講演は信州大学の名誉教授である中村浩志氏だった。中村氏はカッコウやライチョウにおける研究の日本の第一人者であるのだが、中村氏によると「海外のライチョウは人が近づくと、すぐに逃げ去ってしまうのだが、日本のライチョウだけは人を全く恐れない」とのことだった。それはどのようなことを意味しているかという点、「日本においては昔から野生動物と人間が里山や自然を通して共に暮らしていた、共生していたから」とのことだった。これは農耕民族である日本と狩猟民族である海外地域による違いによるものではないか、とのことで海外の研究者が日本のライチョウを見ると、とても驚かれるとのことだった。

口頭発表では、「我が国における教養教育としての野外教育プログラムの可能性—Self authorshipの育成を促す大学体育授業の実践にむけて」と題して佐藤冬果先生(筑波大学大学院)から発表があった。本研究はグローバル化が進んでいる現代世界において、高等教育機関としてそれらに対応し得る知識、知性、教養を身につけた人材の育成が求められ

ているとし、Self-authorship(以下、SA)に関する論考に着目し、SAと野外教育の特徴および指導法との関連を検討することにより、教養教育としての再構築に向けた一つの方策としての野外教育プログラムの可能性を検討することであった。佐藤はこれまでの大学体育の学びの構図を述べつつ、SA獲得を促す新たな授業展開の方法を提案していた。教養教育としての体育に関する先行研究においては西田ら(2015, 2016)が主観的恩恵の抽出をし、性及び運動・スポーツ習慣の差異、大学適応感に及ぼす影響を検討したことを報告しているが、佐藤先生、西田先生らを始めとした研究で報告がされているように、高等教育機関の教養教育としての大学体育の今後の在り方、可能性が益々高まっていくことを表していることを考えさせられる内容であった。

福岡大学の川畑先生は「大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果に関する一考察」と題し、野外教育プログラムの教育効果として、大学生の登校回避感情とコミュニケーション力の変容から検討することを目的とした発表があった。内容としては、「どのような要因が影響を及ぼしたか」という点においては今後検討しなければならないとされていたが、プログラムが学校不適応問題を改善する予防的手段となること、比較対象によってはコミュニケーション力の向上に効果的であることが示された。口頭発表を聴講して感じたことは、社会人基礎力の育成要因の検討や社会的スキルの変容といった研究が増えてきていることから、今後も大学生を対象とし、社会人育成や社会人に必要となる能力をキャンプや冒険教育などの野外教育による効果検討が必要とされており、今後も取り組まれていくものと改めて再認識したものである。小生も身を引き締めて、研究に取り組みたいと感じた学会大会であった。

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士後期課程2年
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University